



教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. 13
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成28年(2016)2月29日

目次

- 大学授業最前線 國學院大學 アクティブラーニング新展開！ 2p
経済学部におけるアクティブラーニングの取り組みとFAについて
根岸 毅宏（経済学部教授）
神道文化学部「神道文化基礎演習」におけるグループワーク導入の取り組み
松本 久史（神道文化学部准教授）・遠藤 潤（神道文化学部准教授）
- ボランティアステーション活動報告 8p
佐藤 静（教育開発推進機構助教）・辻 陽一郎（ボランティアコーディネーター）
- SAインタビュー「あなたにとっての英語とは？」 10p
松岡弥生子（教育開発推進機構准教授）・小館 梓（教育開発推進機構助教）
- 名著探訪 一高等教育、この1冊（第5回）一 13p
- 平成27年度 学外FD研修参加者報告 14p
- 教育開発推進機構彙報 15p
- 砕啄同時 そったくどうじ 一編集後記一 16p

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

大学授業最前線

— 教員の努力！ 学生のまなざし！（13） —

國學院大學

アクティブラーニング **新展開！**

経済学部におけるアクティブラーニングの取り組みとFAについて



教員の授業努力

根岸 毅宏
(経済学部教授)

経済学部では、初年次教育の柱である1年前期の「基礎演習A」と1年後期の「基礎演習B」において、アクティブラーニングを全面的に取り入れた授業を平成26年度から試験的に実践している。その特徴は、授業内容（パワーポイント教材など）の統一化とグループワークの手法である。

「基礎演習A」は初年次前期に履修する必修科目であり、「基礎演習B」は初年次後期に履修する義務履修科目である。義務



履修とは、履修は義務づけるものの未修得者に再履修は義務づけられないというものである。両科目とも、新入生の全員が履修することを前提に24クラスを開講している。このクラスの中で、平成26年度には「基礎演習A」で7クラス、「基礎演習B」で13クラスが試験的な取り組みに参加し、平成27年度には「基礎演習A」、「基礎演習B」とともに15クラスが参加した。平成28年度からはすべてのクラスで、授業内容を統一化したグループワーク手法のアクティブラーニングを全面的に実施する。

「基礎演習A」と「基礎演習B」では、①大学で学ぶための準備、初年次研修、②学ぶための基本的スキルの修得、③専門教育への導入・問題意識の養成などを目的とし、「基礎演習A」では①と②に、「基礎演習B」では③に、より重点を置いている。具体的には、「基礎演習A」では、15回の授業のうち前半でノートの取り方、レジュメの作り方、レポートの書き方、資料の調べ方を学び、後半ではクラス単位で1つの課題に取り組み、パワーポイントを作成し、プレゼンテーションを行い、その内容をレポートにして提出する。「基礎演習B」では、外部組織から提供された課題に取り組み、いわゆるPBL（課題解決型）型の授業を実施している。

この両科目では、基本的に4人が1つのグループになり、「基礎演習A」の後半や「基礎演習B」において課題に取り組みだけでなく、「基礎演習A」の前半における学習スキルの学びにも取り組み。例えば、「ノートの取り方」を学ぶ際には、20分程度の授業を担当教員から受けたり、ドキュメント番組を見たりしてノートを取り、各自のノートをもとに4人グループで「良いノートとは？」を議論し、各チームで考えた「良いノート」を発表する。教員が模範のノートを示し、学生がそれを受動的

に受け止めるのではなく、学生が「良いノート」を議論することで、主体的に「良いノート」を考えることを重視しているのである。受講生が自ら考えたことであれば、その後、他の講義を受けてノートを取る際に「良いノート」を実践してくれるであろうと想定している。

このように、受講生が自ら考え、議論する授業を展開する上で重要になることは、グループで議論する、グループワークが活発化することである。そのため、クラスに1人、FAと名付けた上級生を付けている。FAとは、学生ファシリテーター&アドバイザーの略であり、ファシリテーターとして4人グループの受講生に発言や参加を促し、議論を助ける役割を担い、またアドバイザーとして受講生からの授業や大学生活の相談にのり、先輩としてアドバイスを送る。このFAは、前年の「基礎演習A」、「基礎演習B」の受講者から立候補の形で選ばれた2年生が主体である。

FAをつけた「基礎演習A」、「基礎演習B」は、今年度（平成27年度）からはじまった。FAは、学期が始まる前に2日間（合計12時間）の勉強会に参加し、FAとしての役割を学ぶ。毎回の授業にあたっては教員と1時間弱の打ち合わせを行う。当該授業の内容を確認し、授業内での教員との役割分担を決め、またクラスの状況を把握するための意見交換をする。加えて、FAは月に1度の定例会議を通してクラス状況などについて意見交換をするとともに、外部組織からの支援を受けてファシリテーターとしてのスキル向上にも取り組んでいる。今後は、授業内容の改善について提案するなど、教員とともに授業を作るつもりで活動して欲しい。

FAがクラスにつくことで、授業の進行がスムーズになり、グループワークが活発化するだけでなく、個々の受講生の様子が把握できるようになる。それに加えて、FAは授業を受講している1年生のロールモデルとして模範となる学生像にもなっている。

次年度に向けては、受講生のうち30名の学生がFA候補者として手を挙げている。また今年度のFAが協力して、新学期が始まる前に新FAの勉強会を開催する予定でもある。

経済学部のアクティブラーニングは、次年度から「基礎演習A」、「基礎演習B」ですべてのクラスで実施される。FAは「基礎演習A」、「基礎演習B」の授業をスムーズにする大きな存在であるばかりでなく、入学生のロールモデルとして経済学部に欠かせない存在になって欲しい。

※なお、平成27年度に「基礎演習A」「基礎演習B」の設計に際して学部で行われたアクティブラーニング手法の研究・研修と、FA制度の導入・運用は、國學院大學教育開発推進機構が運営する「学部FD推進事業」「学部学修支援事業」の支援を受けてなされたものである。



FAインタビュー

徳永千尋さん（経済学部2年）

経済学部のアクティブラーニング授業を進行する上で、授業運営の補助者として、また学生へのアドバイザーとして、欠かせない役割を担い活躍しているのがFA（学生ファシリテーター&アドバイザー）です。今回は、高橋尚子教授の「基礎演習」授業を担当する徳永さんに、FAの業務についてお話を聴かせていただきました。

●FAを志望した理由は何ですか。

昨年末の最後の「基礎演習B」授業の際に、担当の先生から声を掛けていただきました。そうした活動に関わった経験を、自分の強みにしていければと思って志望しました。

●「基礎演習B」では、最初はプレゼンの準備を中心にやっているようですが、何か心掛けていることは。

「一緒になって考えられるようにする」ということが大きな目標です。班のメンバー全員が主体的に取り組めるようにしたいと思いました。たとえばアイデアを出すときに、「もっとこうしたら面白い」等々、受講生と私とが一緒になって色々考えることを心掛けています。

何かアイデアが出れば、「それは面白いね」と反応し、声を掛けることを通して、学生と共有の場を創って行こうとしています。そこから、「もっと面白くするにはどうすればいいかな」と、展開を促して行きます。

●横の席に腰掛けて話かけるなど、具体的な動作にも気を配っていましたね。

立ったまま接していると、上から見下ろされて怖いと感じる人もいます。ですから、質問の答えを考えたり、問題を解いたりするときには、同じ立ち位置で一緒に考えるという姿勢で接するため、隣に座って話すことを心掛けていました。

●授業を担当する先生方とのやり取りはありますか。また、FA同士のコミュニケーションはどうですか。

担当の高橋先生に、私のほうから具体的に何かをしてくださいとお願いすることはないのですが、クラスを見ていて気付いたことを先生に伝えたりすることはあります。逆に先生からも、「こんなことがあるんだけど、やってみない？」と声を掛けてくださるので、私から意見を伝えやすい雰囲気ができて、一緒に何かをするチャンスに恵まれています。それが今年一年、うまくFAを続けられた理由だと思います。授業時の役割分担はあらかじめ決まっていて、授業前の短い打ち合わせで、その日その日の役割が振られ、どうすればうまくできるかを考えて実行します。

他のFAとは月1回の定例会議で情報共有を行います。それ以外の時間でも、業務上の工夫やお互いのクラスの雰囲気などについて活発に情報交換を行っています。

たとえば、私が受講生のレジュメにコメントを書いて渡すということをやってみようになったのも、他のFAの方からその試みを聴いて、いいなと思ったことがきっかけです。受講生はみんな喜んでくれて、やりがいを感じました。

●グループワークの手法は色々ありますが、それについて自分でも勉強したりしますか。

高校ではたまにグループワークの授業がありましたので、違和感なく入れたとは思いますが、FAを始めてからは、日々勉強という感じです。先生との打ち合わせの中で、授業の進め方を確認しながら、「ああ、こういうやり方もあるのか」と新しく吸収することも多いです。

私はあまり人付き合いが得意でなくて、みんなで何かをするというのが苦手なところがあります。ただ、FAの勉強会や業務を通して、そうしたことをどうすればうまくできるか、新しい気づきや知識を得ることも少なくなかったと思います。

●色々な学生さんが様々な反応をされるとと思いますが、印象に残ったことはありますか。

前期の頃は、お互いのこともあまりよく判らなかつたのですが、グループワークの時に「そのアイデアいいね」と声を掛けるととても喜んでくれました。他にも、一所懸命グループをま



とめてくれた人には、「今日もありがとう」とか、普段から自分から前には行かない人には「せっかくだし、行ってみない？」とそっと後ろから押してあげるような感じで声掛けをしたりしていました。すると、後期になるととても積極的に発言したり、積極的にグループの方針を引っ張ってくれたりするようになって、すごく雰囲気が変わったと思います。

大学生になると、それまでと違って、みんなからほったらかしにされてしまうことが結構増えると思うのです。ですから、とりあえずクラスに来てくれる人たちには、私も先生も、ひとりひとりに対して「私はすごくあなたに関心があるんだよ」ということが伝わるように、心掛けて接しています。

●受講生から、授業時間外に質問などは来たりしますか。

今までにやったことのない課題が出たときなど、個々人で「どうやったらいいんですか」と質問が来ることはあります。できる限り答えるようにしています。ただ、たとえば自分がやったことのない形式の課題だと、不確かですから、他のクラスのFAと情報交換したりもします。自分で調べられることは調べますし、必要に応じて先生に確認もします。

●ディスカッションで、明らかな見落としや間違いがあるときはどんな風に声掛けしますか。

「間違っている」と直球では言いません。「ここって、どうしてこうなの？」という形で、自分が考えてきたプロセスを確認してもらって、その途中で「あっ、引っかかっているな」というところが出て来たら、そこからまた「どうしてこうなの？」と、段階を踏んで確認し、考えてもらっています。

「どうして、どうして」が続くと嫌な人もいるかも知れないと思うのですが、私のクラスではみんな、丁寧に答えてくれる人が多かったのがありがたかったです。

「間違ってるよ」と直球で言ってしまうと、それまでその人が考えてきた過程も含めて全否定してしまうことになると思います。ですから、ひとつひとつ根拠を確かめてもらいながら、「ここはもっと別にこういうデータは無かった？」というふうに最後に言う、ということをしています。

●プレゼンテーションのコンペティションもやっていますね。準備をする上で、その存在は効いていますか。

そうですね。やっぱり、周りから自分たちがやってきたことを客観的に評価される経験があると違うと思います。コンペティションといった、大会や賞のようなものがあると、準備の過程はどうあれ、最後はできあがったものしか評価の対象とならない。「そういうこともあるんだ」ということを知って欲しいという気持ちもあります。私自身それを痛感したことがあるので……。

また、メンバー全員が発表の準備に参加して「みんなの発表」

と言えるようなものにして欲しいとも思っています。「手伝ってもら、手伝ってもらえている」ということが、グループワークの成功の秘訣だということを知ってもらえたらいいなと思っています。決勝大会などでは、グループのチームワークの良さも評価点になったりしますから、それが「周りはこちらのところを見て、評価するんだな」という、評価基準みたいなものに気付く機会になればとても良いと思います。

●役割分担したとしても、それぞれの持ち寄った結果をうまく取りまとめられないこともありますよね。

そういうチームもありました。それぞれのメンバーが、自分の担当部分についてはすごくちゃんとやってくるのだけれど、グループ内での共有と統合がうまく行かず、結局最後までまとまりが悪いまま終わってしまいました。

分担はもちろん大切ですが、その一方で、誰かが取りまとめ役のようなことをして、「いついつまでにこの部分が必要だけれども、みんなできた？」と確認しながら「それじゃ、このあたりでまとめてみようか」ということができるのが一番良いのかなと思います。

●授業が終わって、受講生から感想をもらうことはありますか。

そうですね。たとえば、最後の授業フィードバック等で、「自

分たちだけでは、グループワークがうまく行かなかったと思う。FAさんがいてくれて良かった」というような感想があったということを先生から教えていただいたりすることがあります。その時は、「頑張ってた良かった」と思います。

感想を聞かないと、自分がFAとしてやってきた色々なことが、本当に必要なものだったのか、満足してもらえたのかわからないですから、フィードバックの大切さみたいなものをすごく感じます。ですから、年度末に全体で、受講生からFAの働きについて点数を付けてもらって、フィードバックしてもらうことも計画されています。

●徳永さんはFAの1期生ですが、今後もこのFA制度は続いて行って欲しいですか。

続いて行って欲しいです。力のある人というのは、一見してわかるような「力のある人」もいますけれども、むしろ最初はよくわからなくて、何かの時に「あ、この人本当はすごく力があるんじゃないか」と途中で気付かされるタイプの人もいます。そういう、力のある人を見つけて、どんどん「FAやってみない？」と、声を掛けて行ければと思います。それも1期生の仕事だと思っています。

(聞き手：戸村・小濱)

神道文化学部「神道文化基礎演習」におけるグループワーク導入の取り組み



教員の授業努力

松本 久史
(神道文化学部准教授)

●教育課程上における位置付け・概要

本学部における専門教育の演習科目は、カリキュラムポリシーにおいて、「入学から卒業まで一貫した少人数による演習教育を中軸としたカリキュラム編成を行う」ことが謳われており、神道文化基礎演習（以下、本科目）は専門教育のうち、必修の基礎専門科目に位置付けられるとともに、二年次から四年次まで継続して履修される演習科目の導入としても位置づけられている。半期二単位であり、一年次前期に開講され、一クラスは約二十人で構成されている。つまりは、学部における専門教育の導入と、一年生の大学における学びとしての初年次教育といった両面の性格を有している科目である。



神道文化・宗教文化について、受講生が自己の関心に沿ったテーマを設定し、授業時に口頭発表することが、最も大きな比重を占める。加えて、神道文化に関する基礎知識小テスト（五回）、課題図書レポートの提出が義務付けられている。また、図書館及び博物館のガイダンス、神社奉職や就職についてのガイダンス、國學院大学の校史の講義なども実施している。

●グループワークの導入の経緯・概要

大学教育において、アクティブラーニングの必要性が叫ばれていることはすでに周知のことであるが、そもそも、演習科目

自体、受講生自らがテーマを見つけ、それに対する知識を深化させ、口頭発表等を通じてプレゼンテーションしていく授業形態であり、本来的にアクティブラーニングの性格を有している。しかし、本科目の実際の運用において、問題が生じていたことも事実であった。それは、発表の機会が一回か多くても二回に限られていたこと、また、他の学生の発表に対して、積極的な質疑応答が見られない、さらには自分の口頭発表が済んでしまうと欠席しがちになる学生がまま見られる、などの問題が、毎年前期終了後に行われている科目担当教員による反省会で常々指摘されてきた。

これらの課題を解決するため、アクティブラーニングの手法の一つであるグループワークの導入を、平成二十五年度から検討が開始され、二十六年年度に実験クラスを一クラス設定し実施した。その結果を受けて、二十七年年度において本格的な運用計画が策定され、担当教員の中で教務委員構成員の学部専任教員五名、教育開発推進機構の兼任教員二名がグループワークを実施することとなった（他に非実施教員が四名）。なお、本科目改善の検討主体は学部教務委員会であり、具体的な立案を担ったのは教務委員である本科目担当教員であるが、教育開発推進機構の兼任教員とも密接に情報交換を行って計画を進めていった。



実施の概要は、四～五名のグループを作り、アイスブレイクの自己紹介などを最初に行い、メンバーを固定化せずに変更しながら、各自の口頭発表のテーマづくり、中間発表等を行っていく三回のグループワークを実施し、毎回振り返りを行い、それに基づいて各人が最終の口頭発表を行うという形式を標準とした。グループワークにおいては、毎回何らかの発言・発表をすることとなり、いわゆる、「お客さん」的な授業態度ではない、主体的な学修態度の獲得が期待されたのである。

●結果についての分析、考察

学生による授業評価アンケートを指標として、授業に対する「理解度」「満足度」の数値を抽出し、二十六年年度と二十七年年度、さらに二十七年年度はグループワーク実施と非実施を比較し、その成果を測定してみることにした（表1参照）。

まず、二十七年年度のグループワーク実施と非実施の比較からは、大きな差は見られず、一見、グループワーク実施の効果がないかのように思われる。しかし、担当教員の構成をみると、非実施の教員は本科目を少なくとも五年以上継続して担当しており、教員としての経年も長い、いわばベテランであるのに対し、実施クラス担当教員は若手・中堅が中心であり、さらには二十七年年度から新たに本科目を担当した教員が二名含まれている。このことを勘案すると、教員スキルに関わらず、一定の成果を上げ得ているとみることができ、共通のシラバスで複数教員が担当する本科目にとってプラスであったと考えられる。また、グループワーク実施と二十六年年度を比較すると、「理解度」「満足度」ともに向上していることが見える。

これらのデータからはグループワーク実施は学生の主体的な学びを促す一定の効果があったといえそうである。

●今後の課題

本年度前期終了後の反省会において、グループワーク実施について教員から、これによって学生が授業に取り組む態度が改善されたという意見が出され、授業評価アンケートの結果からもそれが裏付けられたが、問題点もある。本年度は三回のグループワークを実施したが、グループワークに対して途中で飽きてしまう学生もまま見られること、また、グループワークが開始された以降、全く出席しなくなる学生にどう対応するかなどの点が指摘された。また、グループワークへの取り組みが中心となり、授業内容が盛りだくさんになってしまったことから、小テストや課題レポートについての指導が行き届かなくなってしまう傾向があったことも課題として挙げられている。

来年度は、これらの意見やデータを考慮し、グループワークの実施方法の改善に努め、一年次開講の他の専門科目とも役割分担を明確化しつつ、連携していくことを構想している。



表 1

		理解度					満足度						
		回答数	回収率	かなり そう思う	そう思う	あまり そう思わ ない	思わない	回答数	回収率	かなり そう思う	そう思う	あまり そう思わ ない	思わない
平成26年度		184人	88.9%	36.4%	58.7%	4.3%	0.5%	179人	86.5%	53.6%	43.0%	2.8%	0.6%
平成 27年度	GW 非実施	71人	81.6%	56.3%	36.8%	2.5%	0.0%	71人	81.6%	70.4%	24.5%	0.0%	3.3%
	GW 実施	106人	84.0%	50.1%	47.6%	8.9%	0.0%	88人	83.0%	64.7%	35.2%	0.0%	0.0%



教員からの コメント

遠藤 潤
(神道文化学部准教授)

神道文化基礎演習の目的は、レポートや発表など大学における修学の基本作法を身につけること、ならびに学友たちとの良好な関係の礎を築くことにあり、各二十人前後で構成される。発表については、従来は、各人が全員の前で一回ずつおこなう形態をとっていたが、その予行段階にグループ・ワークを導入し、四、五人程度の少人数で三回程度のプレ発表とディスカッションを実施した。学生たちは、それぞれのやり方でグループ・ワークに参加し、その多くは楽しんでいた様子である。また、担当教員たちからは、最終段階でのクラス全員の前での発表の



質が目に見えて向上したという声が多くあがった。大人数の前での口頭発表は、どうしても形式的になりがちなどところがあるが、事前に少人数でカジュアルなやりとりをすることによって、各学生は自分の発表のあり方を見直すことが可能になったと考えられる。ただ、対人関係を苦手とする学生の中には少数だがグループ・ワークを避けて欠席する者もあり、各人の「実存」に迫りすぎない作法の提示も必要かと思われる。

グループワークの感想

白井博康さん (神道文化学部 1年)



本年度前期の「神道文化基礎演習」では、私達学生が、それぞれ特定のテーマ（今回は神道及び宗教）について調べ、発表することを目指しました。

事前準備として、4人前後で数回にわたりグループディスカッションを行い、グループの中で発表の内容を示し、改善点や取り入れるべき所などを指摘し合っ

て、互いに伸ばし合う時間を持ちました。最終的な発表に至るまでに、レジュメや資料の質、発表時の非言語的コミュニケーション技術がずいぶん向上したという実感があります。

私個人について言えば、今回の発表を通じて、レジュメや資料を読みやすくする工夫に力を入れました。グループディスカッションの際には、他のメンバーからも、「これは何と読むのですか？」と尋ねられることがしばしばありましたので、専門用語等に説明を加えたり、ルビを振ったりするなどの工夫をこらしてみました。相手にとって読みやすく、分かりやすいレジュメや資料を作ること、あるいは発表することの重要性和難しさを感じました。

授業を通じて、自分自身の発表の完成度が、日に日に、目に見えて現れて来たと思います。楽しい時間となりました。

ボランティア ステーション

活動報告

ボランティアステーションは、学生のみなさんのボランティア活動を支援する場です。学内外のボランティア情報を提供したり、関連するイベントを主催したりするだけでなく、ボランティア活動の進め方やそこで生じた悩みの相談も行っています。設立から1年が経ち、のべ500人ほどの学生がボランティアステーションに来室してくれました。ボランティアをしてみたいけれど、どうやって探したらよいか分からないという人、新しいことにチャレンジしてみたい人、今活動中のボランティアで悩みがある人、自分が活動するボランティアを広めたいという人は、気軽にボランティアステーションに立ち寄ってみてください。ボランティアコーディネーターがみなさんの相談に乗って、活動をサポートをします。以下でその活動内容についてご紹介します。

佐藤 静（教育開発推進機構助教）

辻 陽一郎（ボランティアコーディネーター）

ボランティアステーションの活動

◎ボランティア相談

学生のみなさんが、自分に合ったボランティアを探すお手伝いをしています。ボランティア経験の豊富なコーディネーターが、やってみたいことや得意なことなどを聞いてみなさんに合ったボランティアをマッチングします。



◎ボランティア情報の集約

NPO/NGOや地域の団体など様々な本学登録団体から、ボランティア募集情報が集まっています。主なものはボランティアステーション前に掲示してあります。また、ボランティアステーション内のレターケースにボランティアの詳細が書かれたチラシを用意して学生のみなさんが持ち帰れるようにしてあります。



◎ボランティアサークルの活動サポート

ボランティアステーション登録サークルと一緒に連携イベントを実施したり、具体的な活動の進め方について相談に乗ったり、サークルの広報協力をしたりしています。

◎学内ボランティアサークル

- ボランティアサークルSign（手話・障害理解全般）
- 児童文化研究会♪（子ども）
- 国際協力サークル-優志-（国際協力）
- ボランティアサークル☆奉仕会（障がい）
- キッズボランティアサークルVeck（子ども）など



◎学内ワークスタディ

学内ボランティアとして、以下のような「学内ワークスタディ」があります。大学内における様々な事業やイベント、授業・学生生活を支援するための補助的な業務にスタッフとして従事する有償ボランティア制度があります。

- 学生アドバイザー
- エルダーサポーター
- 学生就職サポーター
- SA（スチューデント・アシスタント）
- CA（コンピュータ・アシスタント）
- 学部留学生LLCサポーター
- ノートテイク

◎スタディツアー

◎東北再生「私大ネット36」

東日本大震災をきっかけに、東北の支援と学生の教育を目的として全国26大学が連携し、平成24年に東北再生「私大ネット36（さんりく）」というネットワークが設立されました。主な活動は



宮城県南三陸町で行われるスタディツアーで、毎年春と夏の二回開催されています。毎回異なるテーマが設定され、南三陸だからこそできる学びを、全国各地から集まる他大学の学生たちとの交流を通じて深めていくことができます。当初は、被災地の復興を支援するためのボランティア活動が主でしたが、復興の進展とともに、南三陸町の方々の「ただボランティアに来るだけでなく、南三陸に学んでほしい」との思いを受け、現在のスタディツアーのかたちをとることとなりました。

ツアーに参加したある学生が「南三陸は来るたびに風景が変わっている」と話してくれました。南三陸町は津波で町の大部分が流れてしまいましたが、着々と復興が進んでおり町の様子は日々変化しています。そんな〈今〉だからこそ、現地に足を運んでみてください。自然の様子の恐ろしさと、もう一度町を復興させようとする人間のたくましさを目で直に見て感じることを通して、学生には南三陸に学んでほしいと願っています。

◎紫波町間伐体験ツアー

本学と岩手県の紫波町との協定に基づく「里山プロジェクト」の一環として行われているボランティアにこの「間伐体験ツアー」があります。今年で12回を数えるこの取り組みは、毎年夏に開催され



ています。例年、学生のみならず卒業生も休暇を利用して駆けつけて来ています。

里山を維持するためには、定期的に人の手を入れなければなりません。このツアーでは、現地の方に間伐の仕方を教わって作業をします。また、間伐の仕方だけでなく、里山の暮らしやそこで生きるための知恵について現地の人たちに学びます。自然と人間が共に

りよい仕方で共存するためにはどうしたらよいのか、机の上では学べないことを、からだを動かしながら学ぶことができます。

現地で間伐作業をご指導くださる「山仕事クラブ」のみなさんや、地域の方々との温かい交流もあり、参加した学生たちは豊かな自然に触れるとともに、世代や地域を越えた交流を体験し、参加前よりもひとまわり大きくなって帰ってきました。

これまでのボランティアステーション主催イベント

◎こんなイベントを開催してきました！

平成26年度

- 10/1 ボランティアステーション開設
- 11/8 東北再生「私大ネット36」第2回シンポジウム
- 11/26 私大ネット36春スタディーツアー募集説明会
- 1/19、21 ボランティア初心者説明会
- 2/16 第一回バリアフリー体験会&バリアフリーマップ作り

～車椅子で渋谷キャンパスを再発見！～

学生10名と、車椅子に乗って渋谷キャンパスを回りました。普段何気なく開けているドアやちょっとした段差・坂がバリアとなることを体験し、バリアフリーマップを作成しました。



平成27年度

- 4/17、20 この春ハジメル！ボランティアガイダンス開催
しゅやボランティアセンターの職員と学生ボランティアにボランティア活動の紹介をしてもらいました。2日間で100人近くの参加者がありました。
- 5/27 教育×国際ワークショップ『世界一大きな授業』
- 6/10 もっと東北へ。「私大ネット36」など東北ボランティア合同説明会
AMC1階のスペースを利用し、大学主催の東北ボランティアの様子を紹介しました。各ブースでは、実際に参加した学生がその概要を説明をしてくれました。
- 6/17、7/1 手話でランチトーク～手話を体験してみよう～
手話未体験者を対象に、ボランティアサークルSignメンバーの協力を得て、名前や自己紹介の仕方を学びました。
- 7/2 東北再生「私大ネット36」スタディーツアー募集説明会
- 7/6、8 夏休みに行く！ボランティアガイダンス
4つの登録団体スタッフに、夏休み中にあるボランティア活動の説明をもらいました。
- 8/24 岩手県紫波町における間伐体験ツアー説明会
- 10/18 湊神社祭礼縁日支援学生ボランティア募集
- 10/21、28、11/6、16、20、25 ボランティアアーク～学生ボランティア経験者と気軽に話そう～
ボランティア経験のある学生に話をしてもらう場を昼休みに設け、これまで全6回開催しました。学生同士、和気あいあいとした雰囲気、交流も生まれていました。
- 10/31 東北再生「私大ネット36」第3回シンポジウム



◎ボランティアステーション 利用学生の声

■文学部外国語文化学科2年 S.Aさん

障がいに関するボランティアに興味があります。ボランティアステーションでは、様々なボランティアやNPOなどのイベント情報をいつも紹介してもらっています。自分でも知らない障がいの情報も教えてもらい世界が広がりました。ボランティア活動の相談にもしてもらっています。それから障がいに関する書籍も置いてあるので、調べものがあるときにも利用しています。ちょっとした空き時間に立寄るのでよく出入りさせてもらっています！

■法学部法律学科4年 S.Mさん

不登校の生徒や外国籍の子供に勉強を教える学習支援のボランティアをしています。ボランティアステーションでは自分の活動を学生に伝える機会を作ってもらっています。また、ボランティアステーションのイベントに参加もしていて、内容の異なるボランティアをしている人や、これから始めようとしている人など、いろいろな人と出会える機会が増えてよかったです。

■神道文化学部4年 A.Mさん

ボランティア経験としては、ユネスコ協会にて、日本の文化の発信や、東北への復興支援、訪日外国人へのサポートなど多岐にわたった活動をしています。ボランティアステーションは、暇なときに何か面白い活動がないかなんとなく(軽い気持ちで)聞きに行っています(笑)。ふらっと立ち寄ってみると、気づきや学び、また同じように活動をしている(探している)学生との出会いがありました。ボランティアと聞いて、「なんか難しそう～面倒くさそう」と思う人もいるかもしれませんが、個性的な仲間と出会い、また楽しく学べるチャンスがたくさんありますので、皆さんに是非お勧めしたいです！

開室時間：月曜日～金曜日(10:00～18:00)

(祝日・大学休業日は除く)

場 所：渋谷キャンパス3号館3階 3306

※12:50～13:50は閉室(昼休み)

※夏季休暇・冬季休暇期間は、変更があります。その都度別途ご案内します。

【ボランティアコーディネーターより】

月・水・金在室しています。ボランティアに興味がある人は、気軽に相談にきてください。(辻 陽一郎)



SAインタビュー

あなたにとっての 英語とは？

「英語を学ぶ」と聞くと、どんなことを思い浮かべますか？ 苦手意識を持つ人も多い中、グローバル化が進む社会では、英語の重要性が日々増えています。今回は、教育開発推進機構LLC（ランゲージ・ラーニング・センター）の教員が、SA（スチューデント・アシスタント）をしている学生にインタビュー。「英語を学ぶということ」について、どんなことを考えているのか、率直な言葉を聞かせてもらいました。

—本日は座談会にお集まりくださり、ありがとうございます。今回は、英語学習に対する皆さんの率直な気持ちを伺いたと思っていますが、具体的な勉強の仕方についてのお話というよりも、英語を学ぶということそれ自体について、皆さんが普段どんなことを考えているのか、聞かせてもらえれば嬉しいです。よろしくお願いします。

◆ よろしくお願ひします。

—さっそくですが、インタビューの前に、皆さんに「英語を学ぶことについてどう思いますか」という簡単な事前アンケートを取ってみたのですが、興味深い結果が出ていますね。

回答者は全員「英語は重要だと思う」と答えているのですが、将来、自分が実際に英語を使って行くことについては、「全然イメージできない」という回答が多い。それに、「英語を普段勉強していますか」という質問については、「いいえ」という回答が多いようです。これについて、皆さんどう考えますか。

◆ 自分で振り返ってみても、「思っているだけで、行動していない、できていない」という感じがします。

- ◆ 私は、塾でバイトをしていますので、そのための予習として勉強しています。生徒の質問に答えられないと恥ずかしいですし。……でも、本当の意味で「自分のため」には学んでいないですね。
- ◆ 卒論や就活などで手一杯というのもあります。

本記事は、LLC教員とSAとの間で行われた英語学修についての対談をもとに作成しました。学生の発言は、同趣旨のものをまとめるなど、全体的に編集・再構成して掲載しています。

《参加SA》

- 河内 詩保（文学部日本文学科2年）
 - 池上由里子（文学部日本文学科3年）
 - 岡元 文音（文学部日本文学科3年）
 - 芳賀 慧子（文学部史学科3年）
 - 君島 弘基（文学部史学科4年）
 - 原 静香（文学部中国文学科4年）
 - 吉野 匡哉（文学部哲学科4年）
- ……他数名の学生にご協力いただきました

《聞き手》

- 松岡弥生子（教育開発推進機構准教授）
- 小舘 梓（教育開発推進機構助教）

- ◆ 私は、所属している学科の関係で、英語に触れる機会がほとんどないという事情もあります。他の言語に触れることの方が多いですね。

—なるほど。けれども、「英語を学ぶことは重要だ」ということは、みんなが思っているわけですね。その理由について、考えを聞かせてくれますか。

- ◆ そうですね……とにかく今は、「日本に外国の人たちが来ている」ということがあります。もちろん、日本から外国に行くということも結構ありますし。私も街中で、たまに、外国から来ている方々に道を尋ねられたりすることがあります。その時は、できるだけ英語で対応する努力はしています。
- ◆ 私は中国語を学んでいますが、実際に中国人と話するとき、中国語だけだと難しい部分があって。相手のほうも、まだ日本語がそこまで話せなくて、というような場合は結構困ることがあります。そういう時には、お互いの共通語として、英語で話します。英語は、そういう時にコミュニケーションを円滑にしてくれます。
- ◆ 日本のことを外国の人に伝えたい、という気持ちが私にはあります。受信するだけでなく、日本のことも発信して行かないといけないな、と。韓国人の友人がいるのですが、日本語も英語もできて、今は第三言語を学んでいるそうです。そういう話を聞くと、自分が何だか、出遅れているように思えてしまう時もありますね。
- ◆ 私は資格課程で博物館の授業を取っていますが、博物館の展示を見ても、英語で解説が書いてあったりします。日本の文化や歴史に興味を持って来てくれる外国の方に、日本の作品の特徴などを伝えるときに、英語は必要だと思います。ですから、必要だということは判っているのですけれども、いざ自分で学習しようとする、なかなかうまく行かないというか……英語の読み書きがあまり得意ではないので、自分でやっても、結局長続きしないというのがあって……。
- ◆ 英語ができれば、色々なことで選択肢が広がるので、できないよりはできた方が絶対良いと思います。ただ、英語学習の必要性を感じている学生はとて多多いと思いますが、実際に勉強するか否かはまた別です。私も英語学習への苦手意識が強く、他の専門の勉強に時間をとられたこともあって、英語に手が回らず、4年生の今になって、「もっと英語をやっておけば良かった」と後悔しています。何かしなく

てはと思いつつも、自分から対策を取れていません。

- ◆ 就職活動で、改めて英語の必要性に気付かされた面もあります。中国語ができたとしても、「まず英語ができて、その上で中国語を」という求められ方をしているように感じました。TOEIC® 等もやっておけばよかったかなと後悔しています。
- ◆ 私も英語は大切だと思いますが、辞書を引いてもなかなか答えを出せないなど、しばしば壁にぶつかります。現実に英語ができないと感じているためか、苦手意識があり、今もそれが増大しつつある感じです。

—実際皆さんは勉強していますか？ 学習方法は確立していますか？

- ◆ ほとんどできていないというのが正直なところです。
- ◆ 学習方法についても、なかなか自分なりの方法を見つけることができていません。

—皆さんの話では、たとえば外国の方に道を尋ねられて、スムーズに答えられる時もあれば、躊躇してしまうこともあるようですね。でも、たとえば周りの友達を見て、「自分もやらなきゃ」と思うときもあるでしょう。そういう時は、何か行動に移していますか？

- ◆ 外国の方と話していて、引っかかることは確かにあります。その時は、後でとりあえず辞書は引いてみます。すると、こんな簡単なことがなぜ口から出て来なかったんだと、ショックを受けることがよくあります。
- ◆ 勉強しなくちゃ、と思うこともありますが、まず勉強の仕方がよく判らないので、外国語が堪能な友達に勉強法を聞いてみたりします。後は、電車や街中での英語のアナウンスに耳を傾けてみたり、ラジオや洋楽のCDなどを聞いてみたり……とりあえずそういうことはやったことはあります。
- ◆ 自分の専攻分野では、たとえば地理について学んでいる際、単に地図を眺めているだけでなく、気になったら実際に歩いてみる、という方法をごく自然に実践していますね。けれども、これが英語学習となると、途端にできなくなる。英語の場合でも、実際に使ってみるとか、書いてみる、話してみるなど、同じことが言えるのでしょうか……。
- ◆ 受け身で済まらず、自分で関わり、発信して行くということがもっと必要なのだと思います。座学で終えず、実践するという。

——そうですね。けれども、実践の大切さをここまで理解しながら、なかなかもう一步踏み込むことができない、ということなのでしょう。いったいなぜだと思いませんか。

- ◆ 私は、中学時代のすごく厳しい先生の影響で、苦手意識がついてしまった気がします。今でもそれが拭いきれていません。「私、英語って向かないのかな」って。
- ◆ 高校時代に、自分は英語ができないのだ、という思い込みや精神的な敷居の高さを感じたためだと思います。
- ◆ 私も似たような経験があります。
- ◆ 道を尋ねてきた相手が、私の英語では確信が持てなかったらしく、すぐそこにいた別の人に再度確認していたのを見たときのショックが今でも思い出されます。

——では、逆に、英語をもっと学びたい！ と思う瞬間とは、どのような時でしょうか。

- ◆ 道案内のとき、相手が本当に分かっているかどうか確認してあげたいのに、言葉が出て来なくて、そのまま放っておいてしまったことがあります。そんなときは本当に、「もっと話せるようになりたい」と思いましたね。
- ◆ 私も、道案内をして一緒に歩いている時、「すぐですよ」とか、「留学か何かですか？」など、何か声をかけてあげたかったのにそれもできず、歯がゆかったです。
- ◆ 私も同じようなことがあります。地図を見ながら話していて、相手の言うことが明らかに違って、「違いますよ、そうではなくて、こうですよ」と教

えてあげたかったのに、伝えられなかったことがあります。その後、その人たちはどうなったのか……無事に観光を楽しむことができたのか、考えてしまいました。

- ◆ 自分の経験では、日常で英語が必要な場面に遭遇すると、「やらなくちゃ」「やりたいな」という思いがしやすいと思います。たとえば、駅の周りで外国の方から道を聞かれた時、turn leftとかgo straightなど、簡単な英語を覚えていたらいいなと感じたことはあります。
- ◆ 必要性があると、モチベーションが一番上がります。たとえばビジネスの状況を想定しての会話などは、歌などよりも将来の仕事の役に立つから、真面目に取り組めるかも。

——なるほど。やはり英語はコミュニケーションのツールですから、リアリティのある状況に置かれると、色々と英語を使って意思疎通ができればと感じることもあり、モチベーションアップにもつながりそうですね。では、「こういう英語の学び方をやってみたい」など、何か意見はありますか？

- ◆ 小さなことかも知れませんが、数人から10人程度の少人数の環境で英語が学べたらと思います。大人数だと質問することなどをためらいがちですが、少人数であれば気楽だし、友人関係も構築しやすいと思うからです。

——なるほど。それぞれに合った英語学習の目的や方法がありますから、それを発見することも大事ですね。LLCの外国語学修相談も、是非活用してくださいね。今日はありがとうございました。

英語は気になる存在だし、避けて通れないもの、という意識は、やはり皆さんにもしっかりとあるようです。苦手意識がもしあなたにもあるとしたら、それがどこから来ているのかを一度考えてみませんか。恥ずかしい経験や苦い思いをしたからでしょうか？ 完璧に話せないからでしょうか？

確かに、外国語を一つ習得するということは、容易なことではありません。失敗を繰り返しながら体得していくものですから、それはスポーツと同じ。最近では、ラグビー日本代表が注目されましたが、彼らが成功できたのは、練習を重ね、失敗を恐れず、失敗したことを糧にその都度改善を試みてきたからなのです。

インタビューの中でも、実際のコミュニケーションを通して英語を使った経験を語ってくれた時の、学生の皆さんの目の輝きがとても印象的でした。英語をコミュニケーションのツールとして使う喜びと感動を、1人でも多くの学生に体験してもらいたいものです。

ランゲージ・ラーニング・センターでは、「英語とどう向き合えば良いのか分からない」「学修方法を知りたい」などの悩みに、専門の教員が相談に乗ります。検定試験や就活といった、具体的な目標が定まっていない人でも大丈夫です。皆さんも、是非活用してくださいね。(LLC担当教職員)

名著探訪

— 高等教育、この1冊 — (第5回)

本機構の教員が、自身の日々の教育活動や高等教育研究を進める上で役に立ったもの、これは読んでおいた方がいいと思うものなど、その琴線に触れた1冊を紹介するコーナーです。

● ディープ・アクティブラーニング

昨今の大学の授業改革において、アクティブラーニング(AL)という手法は重要なものであるといわれている。そしてそれは、学生の能動的な教授・学習法の総称、すなわちグループワークやディスカッション等の活動を取り入れた授業形態のことであると理解されてきた。しかしながら、このようにALを理解しその手法に拘泥しては肝心の学びの質が浅くなってしまふ。また、それに関連して以下のような疑念も寄せられている。第一に、一方向的な講義形式の授業であっても魅力的で充実した内容であれば能動的に聞いて学ぶということが可能ではないかということ。第二に、講義形式の授業の問題点のひとつとして挙げられていた「学生の学びの質の格差」という問題は、AL型授業においても未決の課題のままであること。

編者の松下佳代はこうした問題点に触れつつ、ALは大学授業改革の万能薬ではないし、実際には必ずしも期待されている効果を上げているわけではないと現状を剔抉する。そして、こうした問題点を改善していくために今求められているのは、単なる授業形態の改善ではなく、「学習の質や内容」に焦点を当てたより質の高い深い学びであるというのが本書の主張の核にある。それを実現するには、単にアクティブだけでなく学生の関与(engagement)が必要であり、そうした学びを「ディープ・アクティブラーニング(DAL)」と呼ぶ。

本書は理論編と実践編の二部構成をとる。理論編では、ALそのものの定義の確認から、「深い学び」および「学生の関与」というそれぞれの鍵概念について翻訳や先行研究を紹介しつつ「DAL」の再定義を行っている。そして、こうしたアプローチを通じて、「DAL」がいかにして生起するのかそのメカニズムを理論的に解明しようとしている。他方実践編では、AL方式の授業運営が難しいとされている物理学や哲学等の授業における授業実践を取り上げ、DALを生じさせるための方法やその評価のありかたについて具体的な検討が加えられている。

本書は、平成28年1月に刊行されたが、その後1年もたたないうちに6刷となった大ベストセラーである。なぜこれほどまでに、この本が売れるのか。それは、上述したようなALという手法に関する教員の疑義に答えてくれるものだからではないか。また、本書は単なるコツ(tips)を提示するハウツー本ではない。むしろ、学びのあり方について教員の深い理解を促すことを企図して編まれている。すでにALを実践している人だけでなく、むしろALに抵抗感のある人にこそ読んでいただきたい一冊である。(佐藤)



松下佳代・京都大学高等教育研究開発センター 編著
『ディープ・アクティブラーニング：大学授業を進化させるために』勁草書房(2015)

● 知のバリアフリー

平成28年4月より障害者差別解消法が施行される。この法の下で大学に求められるのは、障害のある人に対する差別的取り扱いの禁止と合理的配慮の提供である。それは、キャンパス内の建物等ハード面のバリアのみならず、その構成員としての教職員や学生の中にある差別や偏見によってつくられるバリアを解消していくことが求められる。

ハード面のバリアは、お金さえかければ大部分を解消することは可能である。では、それ以外のバリアを解消していくためにはどうしたらよいのだろうか。周知のように、ただ「差別はいけない」「差別をしないようにしましょう」などと紋切り型のお説教をしたところで差別はなくなるものではない。では、どうしたらよいのか。本書は、大学だからこそできる仕方バリアの解消をすすめていこうとする。つまり、「思いやり」等の「こころ」の問題としてではなく、「知」の問題として障害を捉え返そうとするのである。知らないことが偏見や差別というバリアを生じさせる一因であるからこそ、障害について知ることを通じて人と人の中にあるバリアを解消しよう、と。それが本書で提案されている「障害学習」、すなわち「障害を通じて学び合うこと」である。京大の伝統である「自由」「自主」を柱に据え、大学だからこそできる学びとは何かを探究してたどりついたのがこの学びであると編者の嶺重はいう。つまり、人間とは何ものなのか、というリベラルアーツの根幹を為す問いを中心に据え、そこから学びを展開し、その過程で「障害」の多様なありかたについて知り理解を深めることで真の「バリアフリー」を探究しようとする。

本書は平成25年度に開催された「京都大学バリアフリーシンポジウム」の内容を整理し刊行された。二部構成をとり、第一部では大学における障害学生支援の現状やそれを取りまくテーマにもとづき構成されている。第二部ではさまざまな学問・教育分野に関わる人と障害との接点を中心にまとめられている。また、表紙には点字が、巻頭には点図・触図の地図が掲載されており、視覚に障害がある方の世界の一部を体験できる工夫が施されている。本書には、こうした「障害学習」が生まれた背景や学内支援の歴史のみならず、具体的な支援や日本の障害者施策の経緯・最新動向に加え、学生の生の声まで、知のバリアフリーの実現に向けたさまざまな取り組みや課題について紹介されている。そもそも障害とは何か、バリアフリーとは何か、障害ある学生をどう支援したらよいのか、と思う教職員や学生は、是非とも手に取っていただきたい一冊である。(佐藤)



嶺重 慎・広瀬浩二郎 編、京都大学障害学生支援ルーム 協力
『知のバリアフリー：「障害」で学びを拓ける』京都大学学術出版会(2014)

平成27年度 学外FD研修参加者報告

山形大学FD合宿セミナー参加報告 川田 裕樹（人間開発学部健康体育学科准教授）



9月7日(月)～8日(火)の2日目、山形大学FD合宿セミナーを受講した。研修では6～7名で1グループとなり、プログラムⅠ『大学へのニーズと課題』、プログラムⅡ『理想の大学をつくる』、プログラムⅢ『科目設計1：授業名と目標、内容の作成』、プログラムⅣ『科目設計2：シラバスの完成』の、計4つの課題について、「グループディスカッション～発表」という流れで、教員の果たすべき役割を再検討した。研修では、単なる授業法等のテクニックに関するもののみならず、「今大学は何か求められているのか」、「どのようにすれば魅力的な大学となるのか」といったことを踏まえて議論が進められたので、それらを踏まえた授業構想を行うことができたことが、私にとって大きな収穫であった。このような機会を通して他大学の先生方と議論することはFDについての広い視野を持つきっかけとなることから、今後も機会があれば、このようなプログラムを継続して受講していきたい。

私大連FD推進ワークショップ参加レポート 小林 宣彦（神道文化学部准教授）



去8月4～5日、浜松で行われた日本私立大学連盟主催のFD推進ワークショップに参加した。参加前の自身の課題として、200人が履修する授業で、「学生の意欲や理解の格差」「授業中の私語・スマホ・居眠り」などの問題をどのように解消したらよいか、という点をもってワークショップに臨んだ。ワークショップに参加してみると、様々な分野の先生方が参加しており、抱えている課題も様々ではあったが、共感できる課題ばかりであった。そして、環境が異なる先生方と話し合いを行うことによって、違った視点で学生を考えることができ、気づかされることも多かった。

はじめは、プログラムの構成が簡単なような気がしたが、様々な知識を詰め込まれるよりも、実際に自分達でワークショップを行った結果、残るものが多かった。アクティブラーニングは、レクチャーよりも得る知識は少ないが、身につくものが多いという典型であり、アクティブラーニングの効果を自身の体験によって知る結果となった。この点は敢えて誰も指摘しなかったが、参加者たちは実感していたのではないかと思う。

ワークショップの模擬授業のなかで、自身は講義形式（レクチャー）を行い、高い評価をいただき、授業の手法については適切であることが確認できた。一方、参加前に持っていた課題は、ワークショップによって解消されることはなかったが、授業の方法は千差万別であり、模擬授業や話し合いなどで知った方法を様々に試してみることが大切だと感じた。

私大連FD推進ワークショップに参加して 戸村 理（教育開発推進機構助教）



2015年4月に教育開発推進機構に着任しました戸村理です。大学史・高等教育論を専門にしています。ここでは7月末に浜松で開催された私立大学連盟主催FDワークショップの感想を述べたいと思います。

ワークショップは7名前後で構成されるグループワークでした。初日はまず授業改善について、初年次教育や大規模授業での試みなどさまざまな観点から議論を行いました。次に翌日実施する「デジタル機器を使用せずに板書を中心とした授業」について、制限時間の範囲で模擬授業の計画シートを作成しました。2日目は模擬授業を実施し、教育内容・方法等について、板書の長所と短所を確認しながら、意見交換を行いました。

2日間の短いワークショップでしたが、授業について再考する良い機会を得ることができました。率直な感想として、教授法に完成されたモデルがないことを痛感しました。とくに私大の悩みの種である大規模授業ではなおさらです。今後は本学における効果的な授業方法について考えていきたいと思っています。

教育開発推進機構彙報

(平成27年7月1日～12月31日)

※肩書きは等は当時のもの

行事

○講演会・シンポジウム

7月16日: 大学基準協会「大学の質保証と認証評価に関する講演会」
(於國學院大學)

10月30日: 東北再生「私大ネット36」第3回シンポジウム (於國學院大學)

11月11日: 平成27年度FD講演会 (於國學院大學)

○学生オリエンテーション・学生行事等

7月11日・10月24日・12月5日: TOEIC[®] 学内テスト実施

7月～12月: 各種LLC学生ガイダンス

8月26日: 東北再生「私大ネット36」2015年夏スタディツアー Act4事前研修

9月10日: 東北再生「私大ネット36」2015年夏スタディツアー Act4事後研修

9月26日: TOEFL-ITP[®] (レベル2) リサーチ受験実施

10月～12月: LLC課外TOEFL-ITP[®] 講座

11月～12月: LLCランチタイム講座

12月7日・9日: 東北再生「私大ネット36」春プログラム説明会

12月12日: TOEFL-ITP[®] 学内テスト実施

12月16日: TOEIC[®] S&W学内テスト実施

研修会・打ち合わせ会等

7月11日: 前期ノートテイク研修会

7月30日: 前期ノートテイク最終報告会

7月30日: 前期LLC (ランゲージ・ラーニング・センター) サポーター報告会

7月31日: 前期SA (スチューデント・アシスタント) 最終報告会

8月26日: 東北再生「私大ネット36」事前説明会

9月18日・28日: 後期ノートテイク研修会 (1)・(2)

9月26日・10月3日・24日・11月7日: 後期パソコンノートテイク研修会

9月28日: 後期SA採用説明会

10月9日: 後期LLCサポーター研修会

10月19日: ホームカミングデーSA同窓会 (於渋谷キャンパス)

11月28日: 後期SA中間報告会

12月7日・9日: 東北再生「私大ネット36」春プログラム説明会

FD活動、教育支援

8月～9月: サマーセッションSA運用

7月25日: 第1回FDワークショップ (兼第2回新任教員研修)

①「國學院大學校史」

講師: 大東敬明 (研究開発推進機構校史・学術資産研究センター准教授)

②「ルーブリック評価の実際—学修達成度評価の方法—」

講師: 井上史子 (帝京大学高等教育開発センター教授)

12月12日: 第2回FDワークショップ (兼第3回新任教員研修)

①「シラバスと授業の到達目標の書き方」(授業設計論演習Ⅰ)

講師: 小濱歩 (教育開発推進機構准教授)

②「良い授業のための留意点 (非言語、視聴覚情報の応用)」(教育方法論演習Ⅲ)

講師: 中山郁 (教育開発推進機構准教授)

出張等

7月2日: 駒澤大学ヒアリング (小濱・戸村・朝比奈)

7月9日: 東京海洋大学グローバルコモンヒアリング調査 (松岡・佐川)

7月11日: 創価大学教育フォーラム (第13回FDフォーラム)「高大接続・入試改革で、日本の教育は変わるのか?」参加 (鈴木道)

7月11日: 大学eラーニング協議会 第二・第三部会ジョイントeラーニング研修会参加 (於創価大学) (鈴木道)

7月23日～24日: 京都大学・東京大学・電通育英会主催「大学生研究フォーラム2015・チュートリアルセッション」参加 (於京都大学吉田キャンパス) (佐藤)

7月24日: 筑波技術大学障害者高等教育研究支援センター主催・障害者高等教育拠点事業「FD/SD研修会～障害学生の入学後の支援、ゴールを見据えて～」参加 (於上智大学四谷キャンパス) (鈴木崇)

7月27日: 東北再生「私大ネット36」第3回シンポジウム第1回実行委員会出席 (於大正大学) (鈴木崇)

7月31日: IIBCセミナーin東京～大学におけるグローバル化への取り組み～参加 (松岡・牧野)

8月4日: TOEIC S&Wテスト教員ワークショップ参加 (於東京海洋大学) (松岡)

8月6日～7日: 私大連FD推進ワークショップ参加 (於グランドホテル浜松) (戸村)

8月22日: 立教リーダーシップカンファレンス2015「アクティブラーニングのためにリーダーシップ教育が必要な理由」参加 (於立教大学池袋キャンパス) (鈴木道)

8月27日～30日: 「間伐体験交流ツアーin紫波町」引率 (於岩手県紫波町) (鈴木崇)

9月1日～4日: 「東北再生「私大ネット36」2015年夏スタディツアー」Act4引率 (於宮城県南三陸町) (鈴木崇)

9月11日～13日: 「POD/Teikyo Collaboration Project 2015」FDワークショップ・国際シンポジウム参加 (於帝京大学八王子キャンパス) (中山・松岡)

9月27日: 東北再生「私大ネット36」第3回シンポジウム第2回実行委員会出席 (於大正大学) (鈴木崇)

10月5日：全国障害学生支援セミナー・体制整備支援セミナー1
参加（於文部科学省）（鈴木崇）

10月11日：東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開
発研究センター主催シンポジウム「発達障害と合理的配慮——高
等教育における「イコールアクセス」を考える」参加（於東京大
学本郷キャンパス）（佐藤）

10月14日：東北再生「私大ネット36」第3回運営幹事校会議出席
（於大正大学）（鈴木崇）

10月19日：東北再生「私大ネット36」第3回シンポジウム第3回
実行委員会出席（於大正大学）（鈴木崇・朝比奈）

11月9日：人間開発学会第7回大会「質の高い教員・保育者養成
を目指した実践力育成の課題～教育・保育の課題を自ら発見し自
己研鑽していく力を養う～」参加（於國學院大學たまプラーザ
キャンパス）（柴崎・中山・小濱）

11月12日：第17回図書館総合展フォーラム「大学図書館のアクセ
シビリティ」参加（於パシフィコ横浜）（佐藤）

11月14日：法政大学第10回FDフォーラム「大人数授業での工夫」
参加（於法政大学市ヶ谷キャンパス）（中山・小濱）

11月15日：グローバル人材育成教育学会第3回全国大会参加（於
明治大学駿河台校舎）（松岡）

11月21日：JALT2015：第41回全国語学教育学会年次国際大会
参加（於静岡グランシップ）（松岡）

11月21日：河合塾主催大学・短大トップセミナー2015「学生の
多面的評価を考える—日本の若者をタフに育てるために—」参加
（於東京国際フォーラム）（中山）

11月21日：平成27年度第4回大学行政管理学会学事研究会参加（於
麻布大学淵野辺キャンパス）（佐藤）

11月25日：第19回関東圏FD連絡会出席（於法政大学市ヶ谷キャ
ンパス）（柴崎・小濱・戸村・杉崎・朝比奈）

11月25日：東北再生「私大ネット36」第3回シンポジウム実行委
員会総括会出席（於大正大学）（鈴木崇）

11月28日：立教大学公開講演会「立教と私—しょうがいのある学
生の視点から—」参加（於立教大学新座キャンパス）（佐藤）

11月28日～29日：大学教育学会2015年度課題研究集会「『連携』
から広がる新たな時代の大学教育」参加（於岩手大学・岩手医科
大学）（中山・戸村）

12月4日：CCC（クロス・カルチュラル・カレッジ）公開フォー
ラム「若手グローバル人材育成における産学連携」参加（於カナ
ダ大使館 オスカー・ピーターソン・シアター）（長田）

12月5日：中央大学教育力向上推進事業報告会「ボランティアセ
ンターリーダー養成メソッド」参加（於中央大学）（生形）

12月7日：教職員の組織的な研修等の共同利用拠点・ALPSプログ
ラムキックオフシンポジウム「教育・学修支援専門職の確立に向
けて」参加（於千葉大学アカデミック・リンク・センター）（戸村）

12月9日：神田外語大学SALCヒアリング調査（菅・佐川・松岡）

12月10日：明星大学明星教育センター公開FD研修会「大学にお
けるキャリア教育の過去・現在・近未来—これまでを振りかえり、
今後の課題を探る—」参加（於明星大学）（長田）

12月12日：2015年度国際シンポジウム「国際基準の大学教育改
革—日本・オーストラリア・アメリカの学生調査からわかること
—」参加（於ベルサール九段）（戸村）

12月14日：JASAL 10th Anniversary Conference参加（於神
田外語学院）（松岡・小濱）

12月19日：PDプログラム「学びの深化と学習評価—パフォーマ
ンス評価を中心に—」、同「データを活用した教育改善へのステッ
プ」参加（於東北大学川内北キャンパス）（戸村）

12月21日：JPPF「幹事校・会員校ミーティング」・同「懇談会」
出席（立命館大学東京キャンパス）（中山・鈴木崇・生形）

12月22日：東北大学高度教養教育・学生支援機構言語・文化教
育センター主催講演会「ライティングにおける明示的文法指導の役
割」参加（於東北大学川内北キャンパス）（大津）

12月22日：名城大学ヒアリング調査（於名城大学天白キャンパス）
（中山）

情報発信

11月30日：学内高等教育関連情報配信サービス「高等教育
TOPICS」開始

12月4日：LLC Facebook開設

12月9日：LLC Twitter開設

刊行物（刊行見込）

2月：教育開発ニュース

2月：平成26年度授業評価アンケート分析報告書

2月：教育開発推進機構紀要第7号

そっ たく どう じ 啖 嚼 同 時

— 編集後記 —

今回は冒頭、本学でアクティブラーニングの実践に注力している事例を経済学部・神道文化学部から報告していただきました。特に経済学部では、グループワークを中心とする授業運営の補助にあたる学生アシスタント「FA（学生ファシリテーター&アドバイザー）」を導入していますが、その業務についてのインタビューも掲載しています。アクティブラーニングやグループワーク、あるいは学生アシスタントの実践について関心のある方ばかりでなく、一般に授業を担当している先生方にとっても、興味深い内容になったことと思います。また、本機構のLLC（ランゲージ・ラーニング・センター）の先生方による学生へのインタビュー、ボランティアステーションの活動に寄せられた学生からの声など、全般に、大学の教育活動やワークスタディに学生の参加を促し、また学生の声に耳を傾けることがテーマとなった感があります。今後もこうした動きは大切に育てて行きたいものです。（小濱）